岐阜市立女子短期大学研究紀要第 54 輯（平成 17 年 3 月）

# 小学校英語活動で活用できる発信型教材作成に関する研究

On Creating "Expressive Type" Materials for Elementary School English Activities

中村典生

Norio NAKAMURA

Abstract

Since 2002, many elementary schools have implemented English instruction as part of the Global Understanding Curriculum (Kokusai Rikai Kyoiku). However, while there are many teaching materials that try to get children to learn the cultures of various foreign countries, few of them purport to enable students to pass on both general and regional Japanese culture to foreigners. Considering this, the development of "Expressive Type" English teaching materials for elementary school children is needed, because true international understanding should be one of *mutual* understanding. Therefore, the main target of this thesis is to develop a model for "Expressive Type" eaching materials for elementary school children. We have especially tried to make teaching materials that (i) arouse the children s' creativity, and (ii) are based on regional folklore.

Keywords : 小学校英語活動，国際理解教育，総合的学習の時間，発信型教材

## １．はじめに

平成１４年度より小学校で英語活動が始まった。この英語は，あくまでも総合的学習の時間の中の，国際理解教育の一環としての英語活動であり，この活動自体を行うか否か，また誰が指導するか，ということについても，各学校に裁量が任されている。実施当初はかなり不安の声も上がっていたが，開始から三年目となる平成１６年度には，全国の約 88%の小学校で，何らかの英語活動が行われるに至っており，かなりの早さで広がりを見せていることがわかる。

このように活発になってきている英語活動であるが，中村（2004a）では，いくつかの問題点が指摘されている。その一つに，発信型の英語教材作開発の必要性がある。そもそも英語活動は国際理解教育の一環として行われているのであるから，国際理解は相互理解であるべきであるという本質を忘れてはならない，というのがその指摘である。つまり，国際理解は異文化について学ぶだけではなく，異文化を知り，自国の文化を知り，そして相互に理解し合って初めて国際理解である。そのためには，相手に伝えたい何かを持つ必要があると言うのである。しかし現実の英語活動では，外国の習慣・文化などを知ることに重点が置かれていることが多く，自国から発信するということに重きをおいた活動が立ち遅れていることが問題視されているのである。

また中村(2004b)では，子どもの「気づき」を重視した，自らが進んで何かを話したい気になるような，「創造的」な雰囲気に基づいた英語活動が望ましいことが述べられている。言語の認知面の発達は，態度面の発達に準ずるということがよく言われるが，まさに，教室でも与えられた何かを受け身でやるのではなく，自らが求めていく態度とともに，言語の認知的，形式的な技能の成長が期待できるというのである。

以上の議論を受け，本稿では小学校英語活動の現場で実際に活用できる，「発信型」の英語教材作成を試みることにする。具体的には，地元の説話を英語で学ぶ地域性を重視した教材と，気づきを重視した児童の創造力をかき立てるような教材作成を試みる。

## ２．地域性を重視した発信型英語教材

今回ひとつのサンプルとして選んだのは，古今著聞集[1]などに掲載されている，岐阜県養老郡養老町にある養老の滝にまつわる孝子伝説である。

先にも述べたように，国際理解の本質は相互理解であるので，相手の文化を知るだけではなく，自らの文化・身の周りのことなどを知り，それを伝えるということが重要である。そこで，日本の滝百選にも選ばれており，古くから信仰をあつめる滝でもある養老の滝にまつわる話を知り，発信するための一つの材

料にするというのが狙いである。

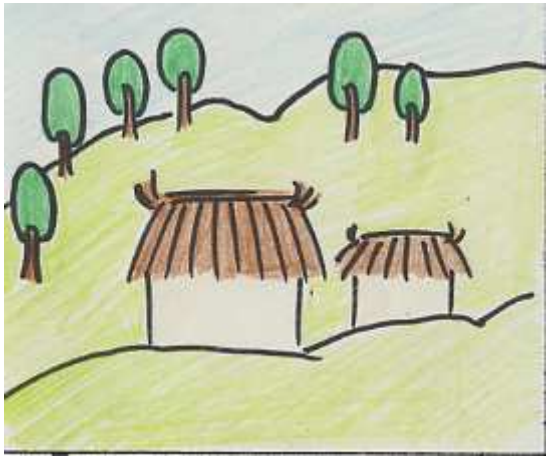
小学校英語活動は音声中心で行うことが謳われているので，聞いて意味を理解するという活動は非常に重要である。したがって，今回はこの孝子物語を紙芝居風に絵におこし，英語を添えて読み聞かせの教材を作ることとした。このような読み聞かせ教材は，絵と照らし合わせながら，子どもが想像力を豊かにして英語を聞くことができるという意味で，非常に有効な教材であると思われる[2]。また，小学生に限らず，視覚にも訴えながら，意味のある英語を聞いて理解するという活動は，あらゆる年層の英語教育にも有効であると考える。

孝子伝説の概要は以下の通りである[3]。

(1) むかし，美濃の国にきこりが住んでいました。きこりは貧しいけれど，親を敬い大切にしておりました。
(2) 彼は毎日山を登り
(3) 薪を拾い集め
(4) それらを街で売って年老いた父を養っていました。
(5) しかし，その収入では父の大好きなお酒を十分に買うことが出来ませんでした。
(6) ある日，いつもよりずっと山奥にのぼりました。
(7) すると，彼は滝を見つけました。
(8) 彼は，この水が酒になったらなあと思いました。
(9) その時彼は突然すべって転んでしまい，しばらく気を失ってしまいました。
(10) しばらくして目を覚ますと，どこからか酒のかぐわしい香りが漂ってくるのです。
(11) 不思議に思ってあたりを見渡すと，岩間の泉から山吹色の水が吹き出しているのです。
(12) 彼がその水をすくってなめてみると，なんとかぐわしい酒の味がしたのでした。
(13) 夢かと思いましたが，「ありがたや，天より授かったこの酒。」と言って，ひょうたんに汲んで帰りました。
(14) 家に帰ってこの不思議なお酒を老父に飲ませたところ，ありえない話しに半信半疑であった老父は一口飲んで本当にお酒だとわかり，手をたたいて喜んだのでした。
(15) 老父がこの不思議な水を飲むと，白い髪は黒くなり，顔のしわもなくなり，すっかり若々しくなりました。
(16) そうして，２人は幸せに長生きしましたとさ。

(1)～(16)の話しをそれぞれ絵におこし，英語を添えると次のようになる[4]。

(1)
Once upon a time, there was a young woodman in Mino. His family was poor, but he was good to his father and respected him.



(2)
He climbed mountains,

(3)
and gathered firewood,

(4)

and sold them in the town everyday to support his old father.

(5)

But his income was not enough to buy the sake that his father loved.

(6)

One day, he climbed a mountain farther away from his home than usual.

(7)

Then, he found a waterfall.

(8)

He wished that this water would turn into sake.

(9)

Suddenly, he slipped on a rock and blacked out for a while.

(10)

After a while, he woke up.　And he smelled the sweet scent of sake in the breeze.

(11)

He felt it was curious and looked around.　He saw golden water gushing out from a fountain between the rocks.

(12)

He scooped the water with his hands and licked it.　It tasted like sweet sake.

(13)

He thought that he was having a dream at first.　He said, “Oh, god…Thank you for this sake” and scooped it into his gourd and brought it to his house.

(14)

Although his father was half in doubt about what his son told him, he was surprised when he took a sip of it.　He smiled and clapped his hands.

(15)

Since his father drank the mysterious water, his white hair turned black and the wrinkles on his face disappeared.　He became young again!!

(16)
They lived happily ever after.

このように，通り一辺倒な昔話ではなく，卑近な説話などを題材にした，その地域に根ざした独自の教材を作ることによって，自分の町，文化に目を向けることができ，異文化コミュニケーションの際の有効なよりどころになると思われる。

なお，このような読み聞かせの教材は，紙芝居的に紙ベースの教材にすることに加え，プレゼンテーションのソフトなどに貼り付け，プロジェクターを用いて提示するという方法も考えたい。

## 2．「気づき」を重視した発信型英語教材

先に述べたように，中村(2004b)では，子どもの「気づき」を重視した，自らが進んで何かを話した気になる「創造的」な雰囲気に基づいた英語活動が望ましいことが述べられている。これは，言語の認知的，形式的な技能の習得は，積極的に話そうとする態度を身につけることに準ずるという考え方に基づいている。

今回，教材作成にあたり留意した点は以下の通りである。

(1) 気づきを喚起する絵教材の作成
毎回その季節に関連した卑近な絵教材を作成する
(2) ターゲットセンテンスの設定
絵教材に関連したターゲットセンテンスを毎回設定する
(3) 吹き出しの活用
各絵には必ず１つ以上の吹き出しがついており，そこでどんなことを言っているのか，を児童に考えてもらう
(4) 文字
絵の中には，様々なアルファベットが隠れている[5]
(5) フラッシュカード
各絵に登場する重要語については，個別に絵カードを作成する（論文末の資料１に掲載）
(6) ティーム・ティーチング
JTE と ALT のティーム・ティーチングを意識した構成にする
(7) メインキャラクターの設定
子どもが親しみを覚えるようなメインキャラクターを男女一名ずつ設定し，毎回登場させる。ここでは，以下のケン（左）とサクラ（右）をメインキャラクターとした。

秋の運動会を題材とした絵教材は次ページの通りである[6]。また，対象学年にもよるが，この教材を用いて４５分間の小学校の授業を２～４時間を行うことができる。なお，この運動会の絵に関するターゲットセンテンスは *Where is … ?* と問われ *Here.* と指差しで答えるものと，*How many ….?* と聞かれて数を答える，というものである。簡単なティーチング・プランの例は以下の通りである。

| 過程 | 活動 | | | 留意点 |
|---|---|---|---|---|
| | 児童 | JTE | ALT | |
| 挨拶(3分) | Good morning Mr. or Ms. …. | Let's start English class. | Good morning everyone. | リラックスできるような雰囲気を作る |
| 導入(17分) | magic box を用意し，児童に magic word である *open* と言わせる(既習)。中には紅白帽が入っており，児童にそれから連想できるものを言わせる(日本語でもよい)。運動会にまつわる語がでて来るので，必要ならば随時 ALT が英語にする | | | 適宜フラッシュカードを用いる。あくまでも子どもたちの気づきを重視するので，絵は最初からは見せない |
| | 教師をまねて質問側(Where is …?)，答える側(here.)に分かれてやってみる | 絵教材を提示する。その中の何かに関して Where is ….? という質問をし，答えの絵を Here と言いながら指差すということを教師がペアでやってみせる | | |
| 練習(20分) | ターゲットセンテンスのペア練習を行う | 時折ペアの交代を指示しつつ，全体を見て回る | 児童の質問を受けつつ全体を見て回る | 絵の中に隠れている文字を探させても良い。 |
| まとめ(5分) | 教師から児童へ，あるいは児童同士で良くできたことを誉めあう | | | 例えばbig action などを目標としておき，良くできた点・人を誉める |
| | Good-bye song を歌う | | | |

吹き出しは児童に「何を言っていると思いますか」と問いかけ，出てきた答えを簡単な英語にするという使い方をする（たとえば，*Cheer up.*　*Don't give up* 等）。

二時間目はフラッシュカードを用いて復習をすることから始め，新出の言語材料である *How many ..?* などを導入し，同様に児童の創造力をかき立てながら授業を行うと良い。

また，その他の「気づき」を重視した教材のサンプルは，論文末に資料２・３として掲載している[7・8]。

## ３．結語

国際理解は本来相互理解であるべきである。しかし，国際理解教育の一環として実施されている小学校英語活動では，必ずしも自らの文化を相手に伝える，ということが重視されていないことが見受けられる。これを受け，本稿では国際理解教育の一環としての，小学校英語活動に有効な，発信型の英語教材を作成することを試みた。本稿で提示した昔話の教材は一つ，「気づき」を重視した絵教材は三つのみであったが，今後これらを増やして行き，小学校英語活動，ひいては日本の英語教育の発展に少しでも寄与できれば幸いである。

## 註

１．成立は鎌倉時代とされる。また古今著聞集のほか，十訓抄にも養老の滝孝子伝説が掲載されている。

２．まずしっかり日本語でストーリーを生徒に周知させてから，英語に移行する方法もある。

３．この文はインターネットサイト http://www.nhk-chubu-brains.co.jp/gifu/yoro/koushi.html から引用した。

４．絵は平成 15 年度，岐阜市立女子短期大学英語英文学科中村ゼミナールに在籍した宮武早百合氏に描いて頂いた。この場を借り，深く御礼申し上げたい。

５．小学校英語に文字を導入すべきか否か，ということに関しては現在盛んに議論が行われているが，著者は音声中心の小学校英語活動の効果を高めるために，文字を上手に利用することが良いと考えている。したがって，この教材にも文字を随所にちりばめてみた。小学校英語への文字導入に関する議論については，中村(2003) (2004c)(2004d)などを参照のこと。

６．本教材作成にあたり，著者も検定委員を務めている，岐阜県小学生英語指導力検定試験の第一回合格者，常川通子・三島伊久美両氏の多大なるご協力を得た。また，絵は平成 15 年度，岐阜市立女子短期大学英語英文学科中村ゼミナールに在籍した後藤祐美氏に描いて頂いた。以上三名に対し，この場を借り，

深く御礼申し上げたい。

７．資料２は my town という題であり，資料３は Merry Christmas という題である。

８．実際に小学生に対し，この教材を用いて教えておられる先生に感想を聞いたところ，絵がかわいいと子どもたちに好評であること，また，このような創造的教材を用いて勉強すると，自分で考えてものごとを伝える習慣がつき，将来自立した学習者，自立した一人の人間になるために有効である，という非常に好意的なご意見をいただいた。

## References

石坂和夫(1993),『国際理解教育事典』創友社.

川端末人・多田孝志(1990), 『世界に子どもをひらく』創友社.

Jeremy Harmer (2001), *The Practice of English Language Teaching*. Pearson Education Limited. 渡邉時夫・高梨庸雄 (監訳) (2002), 『実践的英語教育の進め方』ピアソン・エデュケーション.

小池生夫(監修)(1994), 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』大修館.

文部科学省 (2001), 『小学校英語活動実践の手引き』開隆堂.

中村典生(2003),「小学校英語活動における語彙獲得に関する一考察」『言語文化学会論集』vol. 21, 63-74.

中村典生(2004a), 「小学校英語活動とその周辺」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』vol. 53, 47-63.

中村典生(2004b), 「意味と文字感覚を結びつける小学生用英語教材開発の試み」ことばを考える会第７回研究発表会配付資料.

中村典生(2004c), 「英語フラッシュカードの形態と学習効果の関係に関する考察」『言語文化学会論集』vol. 23, 231-240.

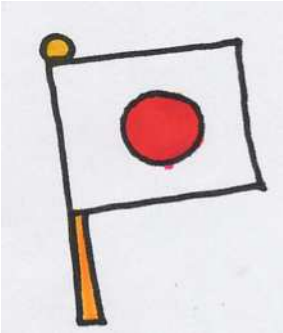
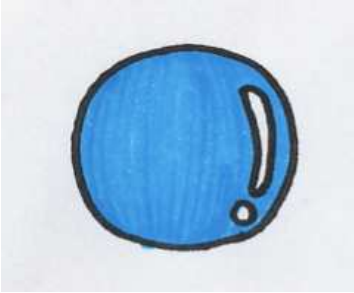
中村典生(2004d), 「小学校英語活動における文字導入と導入語彙に関する考察」『IRICE PLAZA』vol. 14, 49-58.

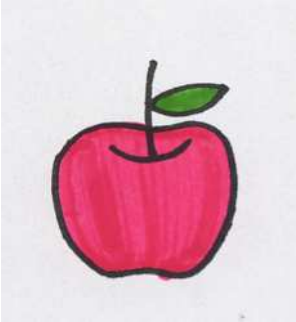
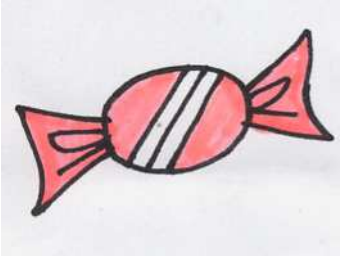
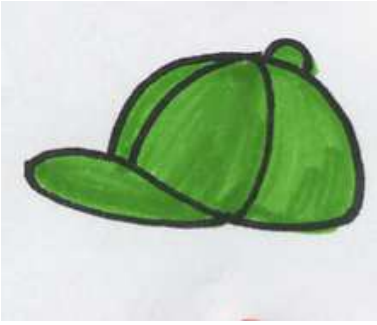
田崎清忠 (編) (1995), 『現代英語教授法総覧』大修館.

安井稔 (2000), 「早期英語教育に思う」『大塚フォーラム』vol. 18, 2-15.

（提出期日　平成 16 年 11 月 26 日）

（資料１）（敢えて文字は添えていない）

（資料２）

（資料３）